

なかしべつ観光情報

見る・遊ぶ



スノーシューハイキング、フォトツアー、星空ウォッチング、乗馬、アドベンチャーカウベルツアー、レンタサイクルなどの情報



泊まる



湯宿、ホテル、ビジネスホテル、旅館、温泉付き宿泊施設などの情報



食べる



そば、イタリアン、中華、食堂、寿司、お好み焼き、うどん、パン、カレー、カフェ、ジンギスカン、焼肉、居酒屋、アイス、お土産などの情報



温泉



温泉の素・中標津6つの旅湯、日帰り温泉マップ、養老牛温泉、温泉+αで楽しむ、などの情報



知^{vol.4}つとく・しるべ



※画像掲載元：湯宿だいいちホームページより

渓流と湯を楽しむ “湯宿だいいち”

山と渓流に囲まれた養老牛温泉郷に佇む、源泉掛け流しの温泉宿。露天風呂は森と川とが溶け合うような造りで、清流のせせらぎと木々の息吹を間近に感じながら楽しめます。

豊富な湯量の美肌の湯と、地元食材を使った旬の料理。山間の秘湯で、心ほぐける癒やしのひとときをお過ごしください。



中標津町のホームページからも
中標津しるべめぐりを
閲覧することができます。



中標津 しるべめぐり

N43°
E145°

中標津の歴史と文化をさまざまな視点から探る

養老牛温泉編

【発行年】2026年3月

【発行者】中標津しるべつなぎ会

(事務局：中標津町教育委員会社会教育課学芸係)

標津郡中標津町丸山2丁目22番地

ダイヤルイン 0153-74-0175



昭和初期撮影(推定)【中標津町郷土館所蔵】

400年以上前から 続く人々の憩いと集いの場・養老牛温泉

標津川上流に位置する養老牛温泉は、400年以上前からアイヌの人々が利用したことに始まります。近代の文献には、祈りを捧げる場である祭壇があったことが記され、かつては神秘的で荘厳な世界が広がっていました。

大正時代初頭、西村武重がシュワンコタン(標茶町虹別に所在したアイヌの集落)の人々との関わりから温泉を確認し、その後、開発を進めたことで温泉街が形成されていきました。今では、天然記念物のシマフクロウが生息する豊かな森の秘境として、多くの来訪者の憩いの場になっています。



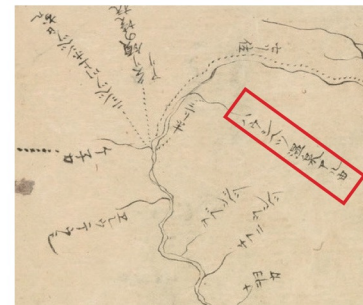
榛 孝太郎(はしばみ こうたろう) ※写真中央、髭の男性
【中標津町役場史料室所蔵】



写真左から3番目が西村武重。武佐岳にて狩猟の際に写した写真。
【中標津町郷土館所蔵】

記録で見る養老牛温泉

養老牛温泉に関する最も古い記録は、松前藩士・今井八九郎が1832(天保3)年に、測量した『東西蝦夷地大河之図』です。そこには、「パウシベツ温泉」が記されていることから、その頃には温泉の存在が知られていました。その後、幕末から明治にかけて北海道や樺太を踏査した松浦武四郎の紀行文や、明治初期に根室地方から北見地方を巡回した開拓使判官・松本十郎の記録にも、この温泉の存在が記されています。



『東西蝦夷地大河之図』
【国立文化財機構所蔵品統合検索システム】

明治の記録に見る温泉に集う人々

1874(明治7)年には、開拓使のお雇い外国人として来道した地質学者ベンジャミン・スミス・ライマンにより、西側の「パウシベツ温泉」と、現在、宿のある東側の「シベツ温泉」において、温度や成分の分析など、初めての学術調査が行われました。ライマンの記録には、和人とアイヌの人々が温泉を利用し、人々が集う様子や、アイヌの儀礼道具であるイナウ(木幣)が数多く見られたことが記されています。

養老牛温泉は、長い年月をかけて人々に親しまれてきた、文化と歴史が息づく温泉地です。



「1898(明治31)年、根室国標津郡標津川上流ボッケ温泉之景」と記されている。【北海道立文書館所蔵】

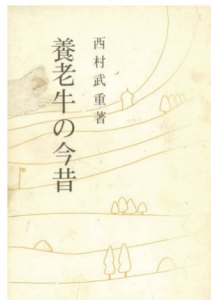


養老牛温泉(湯宿だいいち)

シュワンコタンの人々と西村武重との関わり

大正時代、西村武重はシュワンコタンの首長・榛孝太郎から温泉の存在を聞き、初めてその地を訪れました。そこには、約300頭分のヒグマの頭骨が祀られた祭壇があり、古いものから新しいものまで並んでいました。西村はその光景を、『養老牛の今昔』の中で「神秘的で、荘厳そのものだった」と記しています。

また、シュワンコタンのアイヌの人々が交代で、春と秋のお彼岸に湯治へ訪れ、男たちは熊撃ち、女性はヤマメを釣ったり、温泉でオヒョウの皮をふやかして「アツシ」(アイヌ民族の着物)を織っていたことなどや、当時の情景を詳しく綴っています。

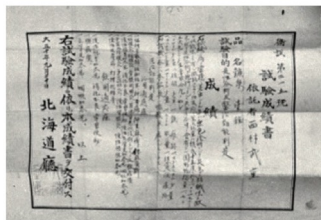


西村武重著『養老牛の今昔』
※他にも著作があります。

温泉街の発展と現在の継承へ

温泉の価値を確信した西村は、1921(大正10)年に道庁から使用許可を得て温泉開発を進めました。さらに私費を投じて馬車道を開削し、1918(大正7)年に完成させました。

戦時中の苦境を経て、戦後は宿や飲食店が並び「紅葉まつり」が開催されるなど最盛期を迎えました。現在は1軒の宿がその伝統を守り続け、全国から癒やしを求める人々が今も訪れています。



温泉成績書
※「温泉成績書」「免許証」は『中標津町史』の画像より復元。



免許証



1921(大正10)年養老牛温泉西村旅館
『養老牛の今昔』より引用掲載

1925(大正14)年10月25日発行の陸地測量部作成の5万分の1地図に、俣落～養老牛温泉までの道路が点線で記されています。その地図に、西村が注記をし、地図の裏には「1918(大正7)年に実施した建設工事は、国有林内という制約下で、重機のない作業は、困難であった」ことが記されています。



【中標津町郷土館所蔵】



養老の滝



「養老牛」の地名は、1897(明治30)年の地図に「ヨローウシ」という地名が付けられており、そのカタカナの地名に、西村が「養老趾」と当て字をし、現在の「養老牛」となりました。

「養老牛」のアイヌ語地名の由来には諸説ありますが、アイヌの女性たちが養老牛温泉にて、イラクサやオヒョウの皮をさらして、アツシを織っていたことから「イ・オロ・ウシ」で「それを・水に漬ける・ところ」(山田秀三)が有力と考えられます。また、西村は、温泉近くの小さな滝を「養老の滝」と名付け、「丸々と肥えた」大きなヤマメだけを選び釣り上げたと自著『ヒグマとの戦い』に記しています。

アイヌが温泉に樹皮をさらしている様子。松浦武四郎著『蝦夷漫画』【北海道立図書館北方資料室所蔵】



1980(昭和55)年10月5日第15回養老牛温泉紅葉まつり
(ヤマメ釣り大会)【中標津町役場史料室所蔵】



西村家でのヤマメの焼き干しの様子。ヤマメを吊るす編み方は、シュワンコタンのアイヌから教わったと言います。正月には甘露煮として食卓に並んだそうです。

